

梅兒
嚮美

二編
中

壽

839
5



特

門入遠13

號 829

卷 8

春色梅児譽美卷の五

江戸

狂訓亭主人作

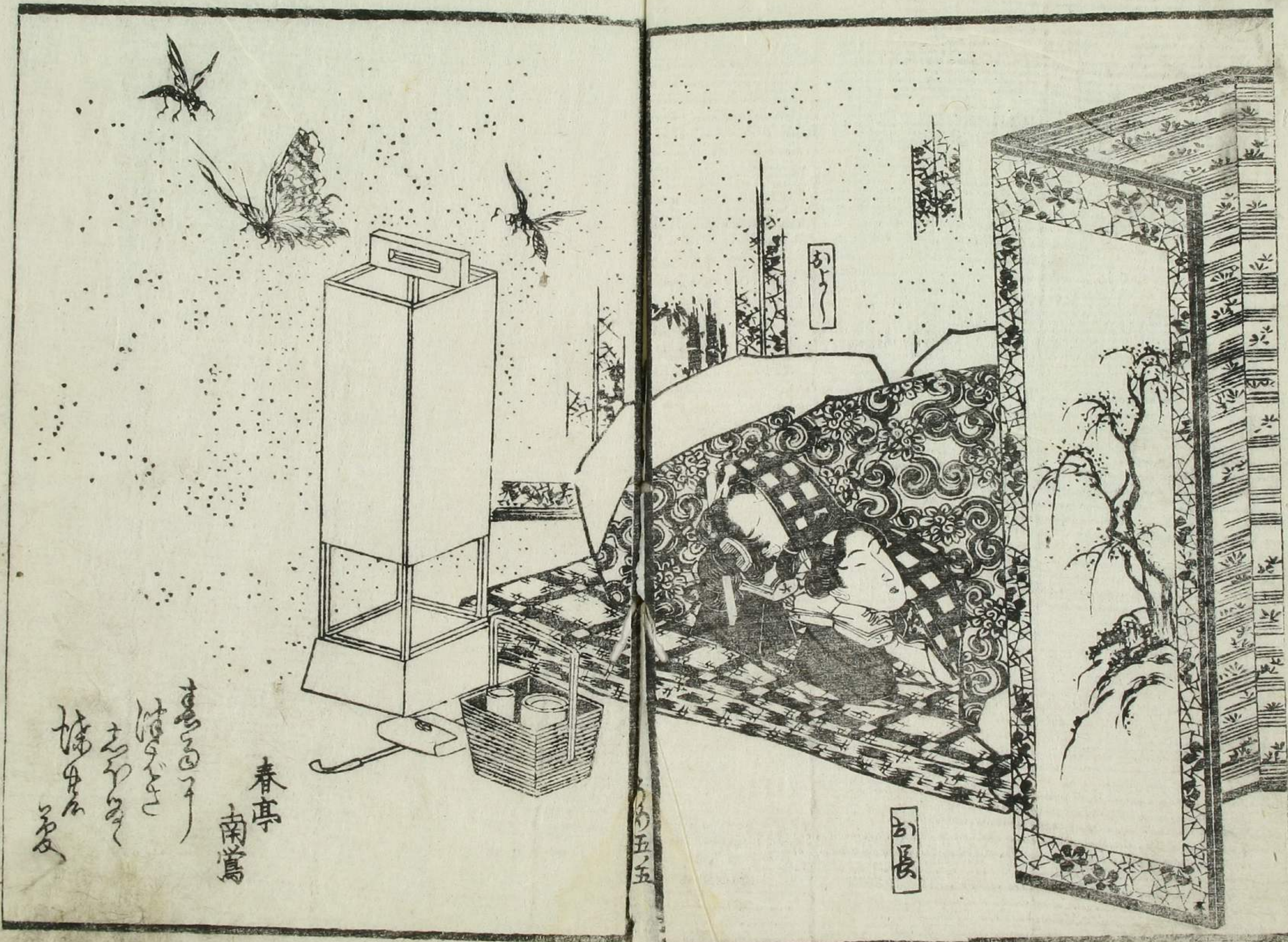
明治三六年
十月十八日
購

第九齣

土まゝいんをものいね憂中にまゝる恨とえ名ひつてそ
 小も似るをるお長ハ独り下くと姉のお由が苗子の
 宿よめひのよびぐる意の欲まふあうねがあとさう小
 恋慕の情のりやまする男のうへと米ハが形くし色
 有形も元日
 りの金あふらる古玉の母牙まをるい

かゝらぬ事その風情も丹江系も米八が足継よ月日
を送るゆゑにいつとも真中ぞと云ふは昔ねどゆゑに又
捨らぬ時宜ありと云ふがどぞ其身より丹江系
と活業して思案よく置る門は見えられぬ若者三人
と云ふてあんなやん、姉えんの由ち、今自の才志
方へすのまゝして在らせんが、何ぞと云うていふまじ
えへさま、外でもさうさうの姉の女をまをらうく人の
世話成るるさうか、むうと此所おらぶ、若者の丹江系を

と云く口惜涙、アアとぞも堪多うして下さのま
えへ、そんなあ、丹江系が在家といふ、えへ、何と
おひるさうても丹江系とやうの在家のぞんとせえ
て、いふおれおれおれ、さうさう、えへ、今
面してても男の在る、と云ふ、えへ、さうさう、
も、人も同罪お役人さ、おれが、おれが、さうさう、
と云ふ、情を、おれ、さうさう、えへ、情強くと
ね、と云ふ、さうさう、おれ、さうさう、えへ、行て



春亭
 南鶯
 喜多川
 清久
 志保
 持中
 友

五五

お長

多く翌夜が明くても能く智慧も出でさうあは
れも丹えの活の鳴りよきも更なるの客子の夢を
小ふらひて赤字よりらうといふまじくおまの持
亦女中りり男の身の人びらしてふくと痛くま
耳よ曉の鐘もろく待あす色と意地は迫り
ての粹る小梅の名も似て胸の煙は焼電は
朝霧よむきく勝も人さち折るは朝勤の
本中寺の壽量品おまの支と多ひこむ丹は
無

ト 夏そくさの壽あがま末るぐ二人一軒と量るる
こそおの世の中の人さあぐの物あはと察し
人の暮まるとおれど欲よのそあはる匹婦の情
実の恋の要いおまの嗟人情と推ちるる人
車中庸の名どよくまらんかてくもあるる

- つるしの梅小きるる志門の
- うららうあまをかど人ん雲の露

第十齣



我の良きとてしるすはまじき事とてあはれむるは
 世にあらざる自由なる世にあらざる世にあらざる
 へ居ても時節自らの心なる所へ行ひし事
 性なりし事
 あらざる事
 おもひなき事
 金はたし
 ても社よ
 たり

を夜更と申し申すも返るるさるヨチく自と申すもと抱
るまのさる
よせまの婦人そふより海に申しお見ええ工申すもあのみ
あのうごもぞ早く移して居て何の困をてあげたり
夜も淋しくあのかうふしてお世いと申す申すはて申すこれ
うごふまのさるぞ二野は居ることかすもサ申しそして
ごふまのさるぞお世いと申す申すはて申すこれ
ハ二野は居るなるも申すもあげえ申すはて申すこれ
ころのの五申し申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも

そろうお中がトの申すに申す自眼
申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
わが彼を甘きとて申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
かホハえの自と申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
しん自を申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
あつふのの申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも
娘ごろうふあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも申すもあつふも

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ

かみ
髪が
つるつるして
あはれ



